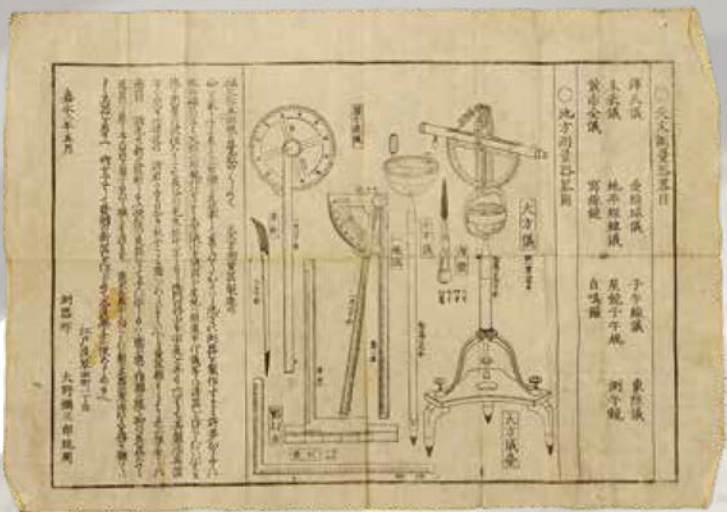


おおの のりちか  
幕府御用測器師大野規周の遺産  
～幕末徳島堰改修工事の測量器具～

ふるさと  
の162  
誇り  
博しポート



測器師大野規周作の地方測量器具の引札 (ひきふだ)



「地方測量之図」 嘉永元年 (1848 年) 葛飾北斎筆 (国立国会図書館蔵)  
小方儀や大方儀、梵天などを使った検地のための測量の様子を描いている

ふるさと文化伝承館 「開削 350 年 徳島堰」展  
大野規周測量器具 特別公開決定！令和3年1月9日(土)～

少し時を遡ると、規周の祖父大野規貞と父規行は幕府御用時計師であり、日本全土の実測地図を初めて完成させた伊能忠敬に小方儀などの測量器具を提供していました。文化8年(1812)4月23・24日、伊能忠敬の測量隊はそれらの測量器具を使い、南アルプス市域の測量を開始しました。(2月号に続く)。

に使用、次に江戸の町の切絵図を改修するために使われた後、甲斐国徳島堰入戸野の新規開削、神山村の八幡沢難工事に大田・阿部・秋山氏が使用したとあります。しかし、大方儀に記された嘉永5年の銘と、木箱の蓋にある「嘉永五壬子年八月置之 大方義 一具 甲府城」の墨書から、この年にまだ築城されていない五稜郭での使用については今後、検証が必要です。現時点では、これら江戸で作られた最先端の測量器具は、当時幕府の直轄領であった甲斐国の甲府城にもたらされ、幕府直轄事業である徳島堰の修築工事に活用され、その改修を支えたと考えられます。



御用旗(ごようばた)  
左下に取水口を意味する「大口」の文字が見える



梵天 (ぼんてん)  
下に竹棒を付け、測量の目印とした



大方儀 (だいほうぎ)  
分度器の裏面に「嘉永五壬子年夏 大野法橋規周造」の銘が刻まれている



小方儀 (しょうほうぎ)  
底に「法橋規周造」の銘が刻まれている

木箱の内蓋には、これら器具の由来が書かれています。記したのは近代砂防工学研究者の諸戸北郎博士。なぜ博士が由来を記したのかその経緯は調査中ですが、肩書きに「砂防協会長」とあることから、協会が設立された昭和3年以降のものと考えられます。この由来書には、幕府が規周に製作を命じ、まず蝦夷の五稜郭の修理

小方儀は方位を測定する器具で、方位磁針盤に支柱を付けて地面に立て、目印への水平角を測ります。大方儀は方位磁針盤に望遠鏡と分度器をつけ、直角の測量も行うようにした機械で、西洋の測量機器を参考に作られた当時の最先端機器と言えます。方位磁針盤には方角を表す「子、丑、寅、卯・・・」と目盛りが刻まれ、繊細な針が磁北を示します。葛飾北斎晩年の作品である「地方測量之図」には、今回発見された小方儀や大方儀とほぼ同じ測量器具を使った検地風景が描かれています。

測量器具は専用の木箱に納め持ち運べるようになっていました。小方儀や大方儀と呼ばれる測量のための器具、測量の際に目印とする梵天や幕府の工事であることを示す御用旗、測量し製図するための八線儀や平行儀、分度器などがセットになっています。また、大野規周の測量器具一式を描いた引札(広告チラシ)も入れられていました。



註1 江戸幕府の職名。天文・暦術・測量・地誌・蘭書の翻訳などを担当した。